

## 大麻製の布切れ



### ●コレクション・データ

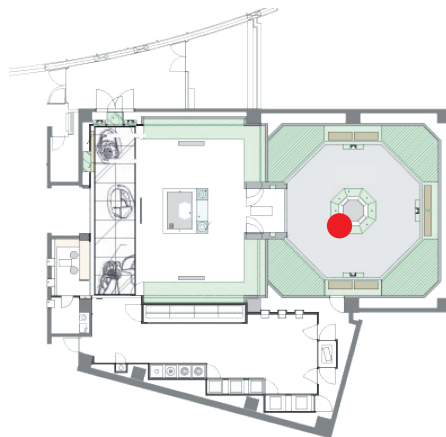
時代 弥生時代中期  
調査 唐古・鍵遺跡第23次調査  
発見年 1985年  
大きさ 長さ34mm、幅6mm  
展示位置 第2室 「布を織る」

二十数片の布切れが、唐古・鍵遺跡から出土しています。織りや材質などの調査から、もともとは、一連の布であったと考えられています。布は植物質なので、普通地中で腐って無くなりますが、今回出土した布切れは、偶然に火を受け、炭化したので、原形を保った状態でした。このように、遺跡の発掘調査で出土する布は、大変貴重な遺物なのです。さて、この布切れは、弥生時代に大陸から伝来した機で織った織布で、故・布目順郎先生（京都工芸繊維大学名誉教授）の研究によって、大麻製であることが明らかにされました。織りが細密で、経糸や緯糸の一部に併糸がみられることから、当時の布としては高級品であると指摘されました。特に併糸は、一般には平絹にみられる技術で、中国では併糸によって織った平絹を「縑」と呼んでいます。

絹の本場、中国でも「縑」は平絹の高級品でした。この縑は、紙とし

て利用された帛布などに使われました。また北朝鮮の平壤郊外に点在する楽浪漢墓では、綿入れの衣服に「縑」が使われた例があります。唐古・鍵遺跡の布切れは大麻製で、平絹の「縑」とは異なりますが、細密な麻布の製作に平絹の技術が応用されたことは、大変興味深い事実です。『三国志』魏志倭人伝には、「禾稻や苧麻を植え、養蚕をおこない、糸を紡ぎ、細苧・縑・絺を産出する。」とあり、倭国では苧麻製の苧や縑が作られたとされています。これまでも日本では「縑」の出土例はありますが、『三国志』魏志倭人伝には、倭王が魏に献上した品目として「絳青縑」がみられ、将来、発見される可能性もあるでしょう。

このように、黒色に炭化した小さな布切れからも、当時の国際関係を垣間見ることができるのです。



ミュージアム上面図と展示位置